地方における研究会の在り方

会 員 重 松 倉 彦*

先般常務理事会の決議に基き本会北陸支部の事業のうち他所にならつて三種目の研究会をおくことにした。併しながら國家又は強力な団体の統制の下に権威者を網羅して設置される研究会とは異つて、地方における研究会の存立には困難な事情が伴なうことは承知の上である。殊に地域的にも経済的にも恵まれない場合には、役員だけで初め寄つて話すときは殆ど残らずの役員が研究会の必要を叫びその設置を希望するのであるが、また学会支部の事業としても会員の熱意を促し、利益をもたらし、引いては会の発展をはかる上において役に立つ仕事でもあるので異議なく決定されるのが例であるが、いざ運営となつて難航に悩む次第である。いま困難と感ずる條項をならべてみると大体次のようである。

(一) 研究会の委員その人が相当に自由のきく地位の人であれば、いつでもその場で直ちに諾否の返答も出来ることであろうし、実行に信頼もおき得るのであるが、会社の代表者とか主人持ちの人とかになれば、独りきめに勝手な約束も致しかねるということもあり、個人的には斯くありたいと希望することでも実行を躊躇するようなことにもなり、不如意の爲めに初めは脱兎の如き勢から漸次熱意を失つて終いには顔も見せなくなつてしまうことになる。つまり良心と拘束の板ばさみになる結果である。

(二) 現実を離れた研究になつたら多くの会員がついて來ない。殊に地方では研究機関も貧弱であるし研究に関心をもつような大会社、大工場も少ない。従つて中小企業を対照とし、家内工業式の技術を課題として研究を始め、一步前進的に手近の問題から解決してゆかなければ一般会員には反應が少ない。賢くなり利益をうける会員も少なくないが、一方研究会の存在に関心を持つて呉れない有力会員も殖えてくる。それかと言つて後者を対照とすれば研究慾旺盛な会員は物足りなくなるに違いない。

(三) 技術の交流ということが研究会設置の重要な理由であるにも拘らず、兎角自分の秘は秘として置いて他の秘をさぐろうとする利己主義となり、わるくすると感情が先きに立つて対立気分が起る。個人的には技術に境界なしと信じている人でも、立場上門外不出の鉄則を守らねばならないことも当然おこる。従つて意味のない研究会になつたり、'お互に氣持をわるくするような結果にもなる。

(四) 研究会には部門別に分科会を設けて専門によつて研究課題を分担することにするのであるが、その委員中には機械のメーカーあり成品加工業者ありだから、メーカーと加工業者とかお互に卒直な意見を交換して、相手に進言し推奨すると同時に相手の言う所に耳を傾ける寛容さが望ましい。そして技術的にも経済的にも一足飛びにむつかしいことを註文しても机上論に終つてしまう惧れがあるから、実情に即して漸進的に改善をはかるよう協力が必要であるが、多くの場合において「出来ない相談」として聞き流しに放置されがちである。

(五) 紡織機工場では最初建設當時に据付けられた型式の機械が基準になり、拡張の場合にも新しい改良型は仲々採用されなくて、多くは同型の機械の増設となるから些細な僅か一箇処の改良でも全工場の

* Kurahiko Shigematsu 福井大学工学部長

作業能率に影響するところ極めて敏感であるか、之れに反して研究とは別に旧態依然たる機械をこさえておれば、成品の生産はいつ迄たつても飛躍的發展しないわけである。

(六) 研究会をよどみなく継続させてゆくためには資料の蒐集、調査、統計を絶えず怠らず、また委員の連絡、会合の準備等を手おちなく世話をする事務局が必要となるが、地方では人と経費の負担が困難である。研究会が活潑になればなる程この点が問題となる。従つて会合が疎遠になりがちであり、それかと言つて資料なくて余り頻繁に会合すれば、出席委員を失望させて次回からの寄りがなくなるという結果になり、研究会の目的を達成しない。基金なしの仕事は運営上甚だ苦心を要する次第である。

雑誌「メリヤス科学」一月号に、中原氏は「研究は最良の投資なり」という一文を寄せておられる。その中で同氏も説いておられるように、いかに不撓不屈の精神があつても、科学的研究の裏附けがなかつたら窮極の成果は得られまい。またいかに独創的な発明考案でも研究費を惜しんでは劃期的工業化を完成することはむづかしかろう。地方にだつて相当に資産のある企業家はある。併し成果を十年、二十年の後に求め、おろかな氣持で巨額の研究費を約束してくれる大度量家が幾人あろう。單に研究者の熱と努力だけでは物にならなくて、先見の明ある熱心な投資家の後援をまつて始めて美事な成功を収め得るのである。こんな分りきつたことでも、「研究こそ眞の投資である」という理由を口を酢つぱくして説いてみても、分つてくれる資産家は少なからう。分つても大胆に投資してくれる人は極めて少ない。そこで地方における研究会の行き方としては大体次のように考えてみたい。

(一) 研究課題が現実の問題から遊離しないようにして、常に研究会に対して企業家の関心をつないでおくことが必要である。技術者がひまをつぶして勝手な詮議だてをする組織であるとか差当り実行困難でまた近き將來も実行の見込なき問題について机上の空論における会合なりと誤解されるようなことがあつてはならない。その事は後日研究委員の派遣、経費の負担、資料の提供等に当り協力を請うとき、企業家の熱意を欠くこととなり運営上に不利をきたすからである。

(二) 学校又は試験場等に勤務の会員で中立的立場にある研究委員が仲介の勞をとつて、研究課題を処理するとか、技術の交流を促すことにつとめるべきであらう。それには学校又は試験場に本拠があつて事務一切を扱うことになつてると至極便利であらうけれど、地方では地域的问题と人員や経費の関係で直ちに実施することは出来ないのが遺憾である。

(三) 見聞をひろめ、知識の交換 技術の交流に資するため見学会を催すことは学会の一事業となつてゐるが、別に研究会に於ては特定研究課題を選び、或る工場に便宜供與方を請うて特別見学会を計画することが望ましい。その際メーカーから改良型機械の展示を願ひ説明でも聞くことにすればお互に益することが大きいと思う。

(四) 学会講演会となると、学会の誇りとばかり地方講演会に於てまで眼をそばだたせるような講演題目をならべて会員を慄然たらしめるのであるが、実際に多数会員の爲めになる講演と言へば、前記見学会等の機会をとらえて、或る特定の研究題目について実狀に即した研究報告でもして貰つたら非常に効果的ではあるまいか。中小企業家の会員を多く包含している地方においては大に考慮を要する次第である。

以上はさしあたり氣のついた点だけを挙げたのであるが、要するに地方に於て健全な研究会を育てあげてゆくには、会員の協力にまづは勿論であるが、地元における有力企業家の理解と援助を請うことが先決問題であり、学会が高くともつてゐるようでは研究会も浮いた存在になつてしまふと思う。